橋本治雑文集成

パンセ VI

自分たちよ!

橋本治

河出書房新社

橋本治雑文集成

パンセⅥ

橋本治

河出書房新社

橋本　治（はしもと　おさむ）
一九四八年東京生れ。東京大文学部卒業。作家。『桃尻娘』で衝撃的なデビューを飾って来、小説、評論、エッセイ、訳にすさまじい健筆ぶりを示している。主著に『暗夜』『蜜刀』『ハイスクール八犬伝』『桃尻語訳　枕草の矢車草』『男の編み物手トリ足トリ』

橋本治雑文集成
パンセVI　自分たちよ！
一九九〇年六月二〇日　初版印刷
一九九〇年六月三〇日　初版発行
著　者　橋本　治
装幀者　鈴木成一
発行者　清水　勝
発行所　株式会社　河出書房新社
東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三二―二
電話　営業　〇三―四〇四―一二〇一
編集　〇三―四〇四―八六一一
振替口座（東京）〇―一〇八〇二
印　刷　三松堂印刷株式会社
製　本　小泉製本株式会社
落丁・乱丁本はお取替えいたします
定価はカバー・帯に表示してあります
©1990　Printed in Japan
ISBN 4-309-60396-3

CONTENTS

メディア大戦争 7
僕、日常、無いんです 30
パラダイス 61
辞書を作る——清少納言を『桃尻娘』で 64
自分が面白く生きてれば
他人の目など気にならない 80
男の仕事＝作家の巻 92
チャンバラから『枕草子』、
古代ギリシアまで 102
いつか世界を征服する日まで 114
ファッションって、何？ 127
文科のヒガミ 154
やっぱり時間が分からない 158
何かの末路 162

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

二万五千五百円の月並 167
なんてったって燕尾服！ 171
半ズボン主義遺文——失われた長靴下（ストッキング）の巻 174
気むずかしい赤胴鈴之助 180
十五少年漂流記 191
私の転職 194
国会議員の為の不幸の手紙 196
とうに涅槃をすぎて——A BOY FROM NIRVANA 198
それは私が不幸だからだ——喫煙考 203
自著解題 207
私はやっぱりバカかもしんない 217
若い人に人気の—— 222
ハシモトオサムがロドンであるということと
いまは19・8世紀であるということに関しての講演 228

セーター騒動顚末記 248
私はアイスクリーム屋の息子だ 278
橋本くんが現在のようなブータレた性格になるまでの経過・背景 283
「だってゼッッッタイにわかってくんないんだもんッ」病患者の告白 293
ちょっと早すぎた自叙伝 296
解題＝俺、やっぱり自分が一番好きだ♡ 331

橋本治雑文集総目次

344

橋本治雑文集成

パンセ VI

自分たちよ!

メディア大戦争

——テレビに大々的に出てしまった(フジ・テレビのキャンペーン・キャラクター)、ということからお聞きしたいのですが。これを最初のとっかかりにします。

橋本　疲れました。(大声の発言)

——どのような疲れですか。

橋本　慣れないことやったから。

——テレビに出るということ?

橋本　雑誌のインタヴューなんかも、そう。ほんとうは今年は全部お断わりしようと思ってたの。まぁ、しょうがないから全部OKしてしまったの。疲れました。

——どんな風なインタヴューを受けてきたんですか。

橋本　なんでテレビに出てんですかって、どこだか分かんないところから、いっぱい来る。

――(笑)不思議がって聞きに来るということなんですか。

橋本　それ以前のことですよ。みんな、俺のこと知らないから、どういう人ですかって来るわけ。でも、俺、自分で自分がどういう人かっていうの説明すんのほとんど無理だと思うもん。

――アハハハハッ。

橋本　どう思ってんだか、逆に聞きたいぐらいなもんだね。

――そりゃ、そうですね(笑)。で、どんな話をするわけですか。

橋本　分かんないよ。一時間だか二時間だか喋っているから、疲れて。

――職業はなんですか、なんてとこから聞くわけですか。

橋本　それはフジ・テレビが作家だっていうことにしているから職業は分かってんだけど、でも、今、作家だからってみんな本なんか読まないから、それは置いといてということになるのね。それを置かれると俺は何もなくなるんだ。

――アハハハハッ。

橋本　どんなこと聞かれたか、片っぱしから忘れたね、そうしないとやっていけないもん。

――テレビに出ると生活が変わっちゃうところがあるから、面白かったでしょう。

橋本　別に面白くない。覚悟の上のことだもの。どんな程度のものかなという現実の検証みたいなものだね、これは。

――それはどんなものでした。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

橋本　うーん。この頃、頭の構造が昔と変わってきちゃって、アレは何だったのかっていうことは書かないとまた分かんないなぁ。前だとわりと目ぼしがついて分かったんだけど、今だとああいうこともあるのか、なんて思っちゃって、うーん、結局ね、普通の人間に戻るためにはテレビに出るしかないなというすごく異常な回路みたい。

もう放っときゃいいじゃない、うるさいなぁ、つうのが自分のなかにあるから。

――すごいですね。すると普通の人間ではなかったと。

橋本　そういう意味では普通の人間なんていないからね。正確にはね、近所づきあいを円滑にするにはテレビに出るしかないってことかな。

――ご近所の認知を得たということですか。

橋本　うーん。認知に関しては「セーター」(『男の編み物　橋本治の手トリ足トリ』河出書房新社)で得ていたのね。「セーター」の本を出した時点で認知は得ていたんだけど、あれはひょっとしたら、あまりにもメンドくさいことを平気でやる人間だから、ちょっと違うのではないかと思われていたのだけれど、テレビにもおおっぴらに出ているから普通の人間として認めてもいいんではなかろうか、つう風な認知かもしれない。

――あまりにもメンドくさいことっていうのは、セーターを編むことですか。

橋本　うん。という風にみなさんおっしゃいます。俺は、そういうもんだと思っている。やる前はメンドくさいことだと思うけど、一コやってしまえば、そういうもんだと思ってしまうから、だいたい、そういうもんだと。

――日常化されているから、そういうもんだと思う、っていうわけですね。

橋本　みんな片っぱしから日常化してっからね、それで、これは日常化しなくていいやと思ったらバイバイね。そんで、テレビは日常化できるもんではないから、バイバイしようと。

――もう出ないんですか。

橋本　原則としては、もう出たくないんだけれど、何か言ってくれば、その時その時の断わり方がメンドくさいから、総論で切っちゃうから、今年はもうテレビに出ませんっていう。そういうことやるとまたよけいな摩擦も多いからな。

――摩擦になりますか。

橋本　もう放っときゃいいじゃない、うるさいなぁ、つうのが自分のなかにあるから。

――自分のなかで。

橋本　自分のなかで。だから、放っときゃいいじゃあないって言うたんびに自分が嫌な人間になっていくから、そういう自分を脱ぎ捨ててもういっぺん小説書き始めなくてはならないのはすごくシンドイからイヤなの。

――「フジ・テレビの顔」だったわけだから、これはたいしたことでしょう。

橋本　分かんない、それは。だって顔だけ外して売っちゃったみたいなものだもの。ほとんど吸いとられた自分が、テレビのなかで一人立ちしていても、自分とは関係ないからね。それには慣れ切っているから――初めの本の著者近影っていうのから始まっているわけだから、自分の顔がひとり歩きしても、俺とは関係ないから。一日で終っちゃった仕事だし、他にアレにもコレにも出て下さいと言われても附帯業務みたいなもんで、ノルマが終っていくみたいなもんだもの。

最終的には、あんた笑顔を買われたんだから笑ってなさい、というところ。

――きっと何度も聞かれて公式見解になっているだろうけど、何んでキャンペーン・キャラクターになっちゃったんですか。

橋本　それほど公式見解になっていない。だって現実には、出るか出ないかの単純な選択だもん。いちばんの疑問は、なんでフジ・テレビが俺を使う気になったかということで、何んで出る気になったのかということは、フジ・テレビがなんで使う気になったのかということを俺に聞いているようなもんだから、そうとしか思えないもん。

――フジ・テレビは何と言っていました。

橋本　笑って答えず。

――アハハハッ。

橋本　何か、俺も基本的に聞きたいなあというわけでもないし。ＯＫした段階で、うまくできるかできないかに問題は変わってきちゃうからね、そんなこと聞いても仕方がないなあと思っちゃうしね、最終的には、あんたは笑顔を買われたんだから笑ってなさいというところなんだなあ。およそ関係ないところで関係のないものを買われるなあってこと。

――笑顔っていうのがいいですね。

橋本　何年か前だと、あんまりヘラヘラ笑ってんじゃあないってねェ。さるスポーツ新聞でエッセイみたいのに挿し絵を描くんで、著者紹介みたいのに写真を使うんで、新聞社の廊下で撮る時に、〝ハイ！　口とじて〟とか言われたからさあ。いつからヘラヘラしていてよくなったのかなあって思うから、またなんか言われんじゃあないかって、とか、基本的にはあんまり落ち着かないってところもあるかなあ。いいや知らねェよってとこもあるけど。

――橋本さんというと、今まではフジ・テレビの顔で、その前はセーターの人で、世間様からレッテル貼られてね。

橋本　ぜんぜん影響ない。ウルサイのね。俺が道楽でやってんだから、どうでもいいじゃあないと思うけどね。ほんとうに、本業は評価されないけれど道楽だけは評価される人だねェ。

――アハハハハッ。

全共闘なんてやってないし、知らないよ、ってとこあるけどね。

橋本　基本的には、昨年、駒場祭のポスター描いて、それと同時に、セーターの本を出して、今年はフジ・テレビのキャンペーン・ボーイになったんですね、ていうのがいちばん正確なのね。十五年の歳月というのは、ない方がみんないいのねということだから、俺もないことにしちゃったのね。

――すごい。

橋本　ある時、昔の友達にフッと会ってさ、東大生がテレビに出ててサッてうっかり言っちゃってヤバイなんて、でも、それでいいんじゃないの。

――駒場祭のポスターから十五年たったんですか。

橋本　そう。ぜんぶ嫌だ、みんな嫌だねェ。あのポスターもそんなに入れ込んでやったわけじゃあないんだし、学校のなかでは、またバカやってと思われていたしさぁ、あの絵は一番のめり込まないものだしさぁ。それをどうしたって言われてもさぁ、当人としては、思想的ななんたらかんたらは知らないってのあるしねェ。思想的ななんとかかんとかは、おまえはダメだってことは、ずーっと言われ続けてきたんだから、今さら、言いたくもないやってこともあるしね。その後、あれは何だったのかってことはトータルな見解はまとめたけどさぁ、そんなことは言ってやりたくもねェやって思うしな

あ。

——アハハハハハハッ。

橋本　だからさぁ、全共闘やってて尾っぽひきずってるみたいなライターがさぁ、昔ポスターやってたわけですがどーたらこーたら、どうすれば全共闘をやめられるのでしょうかってことを遠まわしに聞こうとしたりするけど、知るもんかってことあるしね。

——アハハハハハハッ(大笑い)。

橋本　全共闘なんてやってないし、糸井(重里)さんは学生運動やってたかもしれないけど、俺はやってないから知らないよ、ってことあるけどね。昔からこういう人だし。

——あの世代ということで、くくられちゃうんですよ。

橋本　全共闘っていうのはね、ひとつの通過儀礼だと思うよね。若い子に全共闘がブームっていうけど、別にブームになっているんじゃあなくて、他にブームにするものがないから、マスコミがブームにしちゃってんだと思うよね。それがそのまま通るってことは、ああいう形の通過儀礼がみんな欲しいんじゃないのかな。通過儀礼であれば、自分でつくればいいんじゃあないの。あんなもんやろうと思えばどこでもやれるしね。やっぱり、全共闘やらないと強くはならないと思うね。ダメみたいね。やっぱり、理性に対しては怒鳴るというようなことがあの通過儀礼の本質だからね。それやらないとダメね。いつもいい子になっていちゃダメね。どっか男って理性とは別のアナーキーな部分というのを自分のなかでどう位置づけるかってことをしないとダメだよね。全共闘的なバカヤロウっうのはそ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com